

フィリップ・シドニーと『五月の貴婦人』

根 岸 愛 子*

Philip Sidney and *The Lady of May*

Aiko Negishi

要 旨 政治的意図を持って書かれ演じられることの多かった宮廷余興の一つであるシドニー作の『五月の貴婦人』を取り上げ、その内容を述べ、その背後にある政治的意図を分析することがこの論文の目的である。宮廷仮面劇や宮廷余興と言われるものが政治的であると言われるのは、必ず何かの行事を目的として演じられるので、主催者であるパトロンと観客である主賓との間に政治的関係が生じていたり、主催者の方に政治的意図がある場合に演劇が政治的に利用されるのである。『五月の貴婦人』を主催したパトロンは作者の伯父のレスター伯であるが、彼はこれまでも女王を主賓とする宮廷演劇をいくつか主催してきた。それらの内容と上演目的を探りつつ、シドニーの作品の独自性を論じたいと思う。エリザベス1世の廷臣としてスタートしたばかりのシドニーは、■家、国王、宮廷というものについて明確な理想を持ちつつあったので、自分もその理想に向って廷臣として行動しようとしていた。作家にとっては数々の制約を持つ宮廷余興というジャンルでそれを表現することが彼にとってのまず第一歩であった。

1. はじめに

英国の女王 Elizabeth 1 世 (1533~1603) は毎夏高位の廷臣達の地方の館や城を訪れる行幸 (Progress) をなし、何日間もそこに滞在した。そのような折には野外劇を中心とする女王歓迎の余興 (Courtly Entertainments) が催された¹⁾。1578年5月と1579年5月に女王は Leicester 伯 (Robert Dudley, Earl of Leicester) の所有する Wanstead の館を訪れている²⁾。このいずれかの時に Leicester 伯の甥 Philip Sidney (1554~1586) 作の野外劇『五月の貴婦人』(*The Lady of May*)³⁾ が演じられた。宮廷仮面劇 (Courtly Masque) や宮廷余興 (Courtly Entertainments) では主催するパトロンの行事目的や意図が作品のテーマとなり、主賓の存在そのものが作品に重要な意味を持つわけであるが、*The Lady of May* では女王は重要な登場人物になっている。はじめにこの作品の内容について述べることにする。

女王が館の庭を散策していると、土地の一人の女が「ご正義を！」と叫びながら女王の眼前に飛び出してくる。彼女の求める正義とは、彼女の一人娘が二人の青年から求愛されており、いずれが娘に相応しいか決めかねているが、今二人各々に支援者が加わり流血の決戦にまで発展しそうなので、女王にその仲裁を願い出たというのである。訴えを述べると彼女は直ちに退出してしまう。と

* 本学教授 英文学

いうのは村人が言うには女王の顔を見ると盲になる (“the sight of you is infectious” p. 21) と言われているからだ。

その後森の方から争いの騒音が聞こえてきて6人の羊飼と多勢の獵人が登場するが、彼等は女王だとは知らないのだが、彼女の放つ威厳に驚き見つめている。その中から老羊飼 Lalus が進み出て説明する。ちょっと顔の良い女羊飼に二人の美青年が恋の病に罹ったのだが、「彼女とて貴女の4分の3程の美しさもありませんが」 (“not three quarters so beauteous as yourself” p. 22) と言い、きちんとした説明は村の学校教師の Rombus が適切であると言って Rombus に代わる。彼は村一番のインテリであると自他共に認めている人物であるが、教師としての自分について次のように語る：

I use such geometrical proportion, as neither wanteth mansuetude nor correction, for it is described:

Parcare subjectos et debellare superbos. (p. 23)

(私は優しさを欠くこともなく、矯正も欠くことのない幾何学的均衡を行使しております、といえますものこの様に述べられているからです、

「従順な者をいとおしみ、傲慢な者を屈伏させる」)

彼は Virgil の *Aeneid* (Ⅴ・853) の “Parcere subjectis et debellare superbos” を少し間違っ引用しているが、彼の使うラテン語や引用する文言の殆どが間違っているとテキストの註解者は述べている。後に Shakespeare も『恋の骨折り損』 (*Love’s Labour’s Lost*) でやたらにラテン語を使いたがる教師 Holofernes を作り出したが、Sidney は自らの詩論『詩の擁護』 (*A Defence of Poetry*)⁴⁾ の中で、一人賢人ぶっている学校教師 (“a self-wise-seeming schoolmaster” p. 116) などは喜劇に相応しい人物であると述べている：

These, if we we saw walk in stage names, which we play naturally, therein were delightful laughter, and teaching delightfulness —— (p. 116)

(我々が自然に演じている人間になって舞台上を歩いている人物を見ると、そこには楽しい笑いと教訓にみちた楽しさが起こるのであろう)

Rombus の勿体振った説明によると、五月の最高の婦人として選ばれた乙女の故に卑怯な Cupid が悲哀を掘り出す矢を二人の青年に射たということになる。そこへ当の May Lady が登場して Rombus に言う：

Away, away you tedious fool, your eyes are not worthy to look to yonder princely sight, (p. 24)

(おさがり、おさがり、あんたのように退屈な間抜けは。あんたの眼はあちらにおられる君主様のお姿を見るに値しないわ。)

大変に高飛車な態度で Rombus を退けて自ら女王に語りかける。劇中の人物の中で彼女のみが女王の威力の本質を見抜いており、女王に対しては礼節にかなう態度を取っているが、女王と対等と

思われる程の権威を持って堂々と自分の意見を具申する。彼女が女王に対して身を低くするのは女王の華やかな装いの故でないという。「花々の自然の美程に秀れているものが他にありませんか」(“what is so brave as the natural beauty of the flowers?” p. 24) と言い、女王の威力の本質は生れながらの美にあると言っているのだ。これは女王が人々の眼を圧倒する程の美の持主であるというお世辞を述べているのではなく、当時の流行であった新プラトン主義の美のアイデアの考え方によれば、美は至高の力を発揮するわけであるから、女性君主の威力に適用させることは男性臣下達にとっては最も納得のゆく解釈であったであろう。更に May Lady はこの館の所有者に対しても引け目を持っていないようだ。彼は自分達の隣人の一人にすぎず、ここは自分達村人の森であるからだという。また女王に対しても何ら引け目を感じないのは、如何なる身分も「五月の貴婦人」に匹敵するものはない。彼女が女王に対して敬意を持つのは自分が秀でていたいと思う美点において女王が最も秀でているからだと言う。彼女は最も美しい季節である五月の完全な女性 (“the absolute Lady” p. 24) として選ばれ、二人の男性から求愛されている。一人は羊飼の Espilus であり、裕福で、穏やかな性質で、瞑想的な人間で、時には森の中で詩を作り、彼女に愛の詩を捧げてくれる。他方の求愛者は獵人の Therion である。彼は財産はないが、行動的な人間で森の中から美味しい鹿肉を盗み取ってきたり、色々の贈物を与えてくれるが、乱暴で、時には彼女を叩いたり怒鳴ったりするという。要するに余り功績もないが欠点もない Espilus (“the very small deserts and no faults” p. 25) と多くの功績はあるが多くの欠点もある Therion (“many deserts and many faults” p. 25) のいずれが夫として望ましいかを女王に判断して欲しいというのである。

その後で Espilus と Therion が自分の言い分を述べるが、Espilus は仲間の羊飼達の奏でる楽器レコーダーに合わせて、ミューズの女神の靈感を受けたかのように唄い出す：

Turn up, my voice, a higher note I yield:
 To high conceits the song must needs be high;
 More high than stars, more firm than flinty field
 Are all my thoughts, in which I live or die:
 Sweet soul, to whom I vowed am a slave,
 Let not wild woods so great a treasure have. (p. 25)
 (わが声よ、我が生み出す崇高な旋律に合わせて高くせよ、
 崇高な想念に合う歌は高音なるべし、
 我が生きもし、死にもする全てのわが想念は、
 星より高く、岩石の大地より堅固なり、
 愛しき人、我は汝の奴隷なりと誓いしに、
 かくも高価なる宝を野生の森に与うなかれ)

一方 Therion は狩人の角笛を思わせるコルネットを吹く仲間達と共に現われて、Espilus の言う崇高な想念を否定する：

The highest note comes off from basest mind,
 ...

Thy stars be fall'n, ploughed is thy flinty ground: (p. 26)

(最も高い旋律もしばしば最も低い精神から生まれる、

…

お前の星は地に落ち、お前の堅固な大地も耕されるではないか)

そして彼は自分について述べる：

Two thousand deer in wildest woods I have,

Them can I take, but you I cannot hold:

He is not poor, who can his freedom save,

Bound but to you, no wealth but you I would:

But take this beast, if beasts you fear to miss,

For of his beasts the greatest beast he is. (p. 26)

(私は二千頭の鹿を野生の森に持っている、

私はそれらを捕らえることが出来るが、

お前を捕らえることは出来ない、

自分の自由を保持する者は貧しくはない、

私はお前にも縛られているが、

お前以外の富を求めない、

もしお前は野獣を捕らえられないと思うならば、

この私を捕らえよ、

野獣達の中で最も偉大なる野獣こそこの私なのだから)

その後は両方の支援者達の代表による推薦の辞が続く。羊飼側からの代表者である老人の Dorcas は Espilus の美声を称賛すると、獵人側からの代表者である Rixus は小夜鳴鳥の声よりは子牛の鳴き声こそ重要であり、獵人こそ行動力があり有用な人間であり、羊飼は a tame fool だと断定する。Dorcas が獵人は a wild fool であり盗人ではないかと言いつ返す。遂に Rixus は女王に対して、女王は美しいばかりでなく、賢い人であり、女王の眼と呼ばれている Leicester 伯に対してさえ、情に溺れず厳しい罰を下す位の人であるからと述べたことから、羊飼と獵人の性格や価値観の違いは、実はそのまゝ女王の廷臣達の働く姿整の象徴となってゆく。Dorcas によると、羊飼は自分達の飼育する子羊の様に白く、密のように甘く、心に嫉妬を抱くこともなく、その眼は自然の運行を探求することのみ忙しいという。「聖職者が言うように、もし瞑想 (contemplation) が最も立派なことであるならば、法学院出身者 (templar) にまさに相応しい生き方ではないか——暴政に従うこともなく、卑屈な追従に陥ることもないのだから。私の聞いたところでは、如何に多くの廷臣達が野原の木立の中で悲嘆にくれているか。ある者達は、彼等の眼を眩惑させ、彼等の心を焦す女王の身分の高さの故に。ある者達は女王の極度の美と入り混っている極度の冷酷さの故に。またある者達は、女王への愛から為す労働も、女王の大いなる叡知にとっては愚行としかならぬ故に…そして長い間の無駄な労働と彼等の不満が生み出す羊毛は絶望のみと知って、若い廷臣から老いた羊飼へと変ってしまったのだ。」(p. 28)

これに対する Rixus の反論は、羊飼の生活の長所が静かな田園生活にあると言うのならば同じ

ことが獵人の生活にも言える。しかもそればかりでなく獵人達はその中であっても、勇敢な行動力で身体を強化し、精神を高めているという。彼は森の木々に例えながら、「真直ぐに育つものが善であるところでは、我々の生き方に匹敵するものが他にあらうか。我々は希望がなければ、直ちにそれを求めて走り回る。そして走りながら、間もなく手に入れる。一つの最も高きものを長い間追いかけて、遂には女王は決して手に入らぬものと諦めてしまう者達と我々は違うのだ」(p. 29)。即ち行動的で、冒険心があり、命を惜しまず君主に奉仕する Therion の生き方こそ廷臣として望ましい姿整ではないかと訴えている。

この後再度登場した Lady May は女王に決定を促しながら、「私の夫を判断して下さることで、貴女様は私の問題以上のことの判断をお示しになるのです」(p. 30)。この野外劇の中で女王が示す判断はフィクションの世界を越えて現実の政治の世界における女王の判断を示すことになるのだ。この直後のト書の中で作者は、女王が Espilus を夫として望ましいと判断を下したと述べている。しかし女王が何故に Espilus を選んだのか、またその説明の言葉などは、この台本の中に入れる資格はないと作者は述べているので、我々読者は次の Espilus と Therion の唄う歌から作者の意図を想像するしかない。Espilus は述べる：

Silvanus long in love, and long in vain,
At length obtained the point of his desire,
When being asked, now that he did obtain
His wished weal, what more he could require:
'Nothing', said he, 'for most I joy in this,
That goddess mine, my blessed being sees.' (p. 30)

(森の神シルバーナスは長年の恋に、

長年報われずでありしが、
遂に己が欲する目標を入手せり、
己が欲する至福を得し今や、
更に何を求めるかと問われしに、

「無し」と答えたり、「我女神、我至福の対象を見ることにのみ我は大いなる喜びを感ずる故に」)

また Therion は次の様に唄う：

When wanton Pan, deceived with lion's skin,
Came to the bed, where wound for kiss he got,
To woe and shame the wretch did enter in,
Till this he took, for comfort of his lot:
'Poor Pan,' he said, 'although thou beaten be,
It is no shame, since Hercules was he.' (p. 30)

(浮気な牧神パンは獅子の毛皮で偽装し、

鬨に來りて接吻せんとて傷を得たり、
哀れなる彼は悲しみと恥辱の中に有りしが、
遂に運命の慰めによりてこれを得たり、

「哀れなるパンよ」と彼は言う、「汝は打たれしが、彼はハーキュリーズなる故に、恥ずるに価わず」)

ここで少々異様に感じることは、元来羊飼いの信奉する神が Pan であり、猟人の信奉する神が Silvanus であるから、Espilus が Pan について語り、Therion が Silvanus について語るだろうと思う読者の予想に反して、各々が敵対者の奉ずる神について語っていることである。このことについて L・A・Montrose が指摘している様に⁵⁾、女王は劇中の登場人物であるが、劇を超越した存在である故に、作者自身も女王がいずれを選択するか定めておくことは出来なかったから、どちらを女王が選んでもよいように準備しておかねばならなかった。伯父 Leicester 伯がパトロンであるこの劇は、Leicester を象徴する人物 Therion の勝利を信じたいし、また望みたい Sidney であったが、女王は従順な廷臣を象徴する Espilus を選んだ。敗北した場合の Therion の扱いには完全な敗北にならず、彼の人間性を救う妥協点を残しておく。Therion の愛は受け入れられず報われることはなかったが、それでも高潔な彼は女王への愛は変わらず、唯女王の顔を見ることだけで幸せなのだと言わせている。一方勝利した時の Espilus に対しては恥ずべき者という非難が含まれている。女王の寵愛を得るために正々堂々と行動したのではなく、何の功績もない彼が選ばれたことに割り切れなさが残る。こそこそと闇に行ったが、接吻どころか傷を負ってしまった。相手は女ハーキュリーズであるから仕方がないというのだ。

最後に Rombus と女王のみを残して全員が退出した時、Rombus は瑪瑙を繫いだロザリオのような物を女王に贈呈してエピローグを述べる。その内容はパトロンである Leicester 伯についての弁明に終始している。Wanstead の館の主人 Master Robert は正直者で、村人に愛されており、生活に必要な種々のものを気前よく与えてくれる善き領主であるという。ただ問題となるのは法王派の大罪 (“papistical enormity” p. 31)、即ちカトリック信者であることである。禁教のカトリック信者のことを隠しておくことは自分の良心の許さぬこと故に、Rombus は女王に明かすのだが、彼がそのことを知ったのは、Master Robert がロザリオを持っていて、それを使って毎日祈っているのを見つけたからだという。そして Robert は市民法によって裁かれた時に本人も認めたので、女王の法によってロザリオは没収され、二度とそれを要求することはないだろうので釈放された。このようにパトロンと主賓との間の緊張関係を示す実に不可解なエピローグでこの野外劇は終わっている。

2. Leicester 伯と女王

Leicester 伯 Robert Dudley (1532? -1588)⁶⁾の祖父 Edward Dudley は Henry 7 世の収税官であったが、Henry 8 世が即位するや否や、人民の人気を画策した科で処刑された。その子 John Dudley は反逆者の子という汚名にもかかわらず、Earl of Warwick という高位を与えられ、Edward 6 世の指導的な顧問官となり、更に Duke of Northumberland という高位に昇進したが、王位継承問題で反逆罪に問われ処刑された。その子 Robert を含む 5 人の息子達はロンドン塔に投獄された。この時の王位継承に直接の関りのあった四番目の息子 Guildford Dudley は Mary I 世に処刑されたが、他の 4 人は生き残った。異母姉である Mary I 世の在位時代に経済的に困窮していた Elizabeth を Robert は自分の土地を売って援助したことにより、Elizabeth が即位するや否や、彼は主馬頭 (Master of the Horse) に任ぜられる。1549年に彼は Amy Robsart と結婚しているが、

Robert と女王の親密さについて、1559年当時の駐英スペイン大使がスペイン国王 Philip 2 世に報告して以来、本国のみならずヨーロッパの各宮廷に知れ渡ることとなった⁷⁾。1560年9月に Robert 夫人の Amy が自宅の階段から滑り落ちて首の骨を折って死亡するが、一時は夫による妻殺害説も流れた。何とかその嫌疑を晴らした後は、Robert と女王の仲は公然のものとなる。1559年4月に女王は彼をガーター勲爵士 (a Knight of Garter) に叙している。Elizabeth 宮廷の中のもう一方の旗頭であり、女王の信頼も厚く、勝れて冷静な官僚と目されていた Burghley 卿 (Lord Burghley, William Cecil) は Cambridge 大学の学長であったが、1564年には Robert を Oxford 大学の学長に任じている。またこの年 Earl of Leicester の称号をも与えた。これは国王の息子達や王位継承者にのみ与えられる地位である。祖父と父の二代に渡って国家反逆人として処刑された家系の子孫が異例な出世をしたのは主馬頭として女王の傍近くに居る機会が多かったことが幸しいというのが歴史家の見方のようにであるが、1560年代の前半は女王の Leicester 伯への信頼が非常に厚く、女王は彼を眼 (eyes)⁸⁾ の渾名で呼んでいた。この渾名の由来として Maria Perry は二つのことを挙げている。第一は「監視役」の意味であり、第二はルネッサンス時代の恋愛観から由来しているという。愛の理想は魂と魂の融合にあると考えられており、魂の窓である眼を通して愛が始まると考えられていた。少なくとも彼は女王にとって恋愛の対象であったと言える。1560年代から1570年代にかけて処女女王 Elizabeth の結婚と世継ぎの問題は英国国民にとって最大の関心事であり、又ヨーロッパ各王室においても外交と領土拡大に絡む政治的関心事であった。Leicester 伯も女王への愛の故か、或は女王の夫になることでより大きな政治的権力を得ようという自己の野望の故か、女王に結婚を奨める示威運動を演劇という手段を使って開始する。1561年ロンドンの法学院 (Inns of Court) の一つである Inner Temple は Robert Dudley を Christmas Prince に選ぶ。法学院の演劇と女王との関係については Marie Axton の著書 *The Queen's Two Bodies*⁹⁾ の中に詳述されているが、クリスマス時期になると法学院に関係している法律家達は Christmas Prince なるものを選ぶ。これはクリスマス時に催される舞踏会や槍試合や宴会など一さいの余興を統轄する役であり、演劇の中で彼等が創作する仮想王国の王にもなる。この王国の特徴は「神によって与えられる国王」の、しかも「男性の支配する王国」¹⁰⁾ であり、Elizabeth の父である Henry 8 世を模範としている点にあった。Christmas Prince になった Dudley は早速 Inner Temple の出身者である Thomas Sackville と Thomas Norton の合作による *Gorboduc* を宮廷の女王の眼前で上演させた。二人の王子 Ferrex と Porrex の相次ぐ若過ぎる死によって後継ぎがないまゝになった英国が内乱に発展するという内容のこの芝居のメッセージは明白で、世継ぎの見通しのない女王に結婚を迫り、世継ぎを示す責任を迫るものであった。更に同時期に Dudley は美と欲望 (Beauty and Desire) をテーマにした仮面劇を女王の眼前で演じさせている。美と欲望のテーマは Henry 8 世が自ら出演した仮面劇の内容であった。Henry 8 世は仮面劇や仮装を好み、自ら主役を演じ、人々の意表をつくメッセージを与えることが多かったのだが¹¹⁾、1522年の仮面劇で炎の色の衣裳の王が「欲情」(Ardent Desire) を演じ「美の貴婦人」(Lady Beauty) の城を襲い求愛するという内容であった。そしてその後の舞踏会で Anne Boleyn と踊ったという。この仮面劇にヒントを得て Dudley は大胆にも Lady Beauty に女王を、Desire に自分を象徴させ、Desire が Lady Beauty に求愛し、正義を

司る女神 Pallas が結婚の承諾を与えるという筋にした。しかも Pallas が承諾を与えるや否や、Desire は Perseus に変身する。即ちオリンピアの神々の一族になったのである。フィクションの世界の中ではあるが、王族の女王の夫として神の一族ならば身分において不足はないというのである。Perseus は怪獣からアンドロメダを救って妻にした男であり、Dudley も自分の雄ましい行動力を Perseus に象徴させた。

1565年に Dudley の主催によって別の法学院 Gray's Inn の法律家達によって仮面劇“Diana, Pallas”が演じられた。結婚を肯定する Pallas と独身を肯定する Diana との討論がこの劇のテーマになっている。女王と共にこれを観劇していた駐英スペイン大使の De Silva が自国の王に当てた手紙の中でこれに触れている：

筋は結婚問題に基づいていました、Juno と Diana の間で論議され、Juno は結婚を奨励し、Diana は純潔を奨励していました。両者の間で各自の論点を擁護するための種々の事柄が述べられた後で Jupiter が結婚に好意的な判定を下しました。女王は私の方を向いて申されました、「これは全て私に抵抗しているのです。」¹²⁾

この頃から女王と Leicester 伯の仲も少しずつ変化してきた。女王には同時並行して Austria の神聖ローマ帝国皇帝 Charles 5 世の息子の Archduke Charles との結婚交渉が進んでいた。Leicester と常に対立する立場にある Burghley がこの交渉を熱心に進めていたが、やはり Charles の宗教がカトリックであることが難点となっており、1568年 Charles が正式に断ったことで終結した。しかし Hapsburg 家と Elizabeth との縁談の噂が流れるや否や、フランス宮廷の事実上の支配者である Catherine de Medici は英国と神聖ローマ帝国との連結そしてその背後にいるスペインの接近を恐れて、直ちに自分の四男 Anjou 伯 Henry と Elizabeth との結婚を提案した。フランスとスペインとが当時のヨーロッパのカトリックの二大勢力であったから互いに相手を牽制していたので、Catherine de Medici はこの結婚に熱心であったが、当の Anjou は女王が18才も年上であり、宗教の違いもあって積極的ではなかった。1574年に現フランス王 Charles 9 世（Catherine de Medici の次男）が死亡して Anjou が Henry 3 世として即位すると、代って彼女の 5 男 Alençon 公 Francis（Henry 3 世即位により彼がこの後は Anjou 伯となる）を Elizabeth の結婚相手として Catherine は交渉を始める。Alençon は母親の干渉を嫌って国際舞台で活躍したいと思っており、当時 Netherland はカトリックとプロテスタントの間の紛争が絶えなかったので、1578年に軍隊を率いて Netherland に上陸したが大敗してフランスに戻ってきた。彼は強い軍隊を組織するための経済的支援者を必要としていたので、24才も年上である Elizabeth との結婚に積極的であった。1579年 1 月には友人の St. Marc 男爵 Jean de Simier を結婚交渉特使として英国に行かせている。特使を迎えた英国では 3 月から 4 月にかけて女王の顧問官達によるこの結婚についての討議が行われた。賛成派は Burghley 卿 William Cecil と Sussex 伯 Sir Thomas Radcliffe であり、反対派は Leicester 伯と後に Philip Sidney の岳父になる Sir Francis Walsingham であったが、特使に伝えられた結論は「Alençon が女王と同等の支配権を求めらば、議会の反対がない場合のみ可能」¹³⁾ というものであった。これに対して特使の要求は「Alençon に対して年間 6 万ポンドの収入」¹⁴⁾ で

あったという。その後 Alençon も女王の私室に秘かにやってきて親密になってゆく。女王はプロテスタント派のリーダーとして期待されていたので、Alençon は Netherland のユグノー派の支援ということで女王より多額の資金を得て再度 Netherland に遠征するが大敗に終る。そしてこの縁談も1584年の彼の死によって終了した。

以上のように Sidney の野外劇が創作される頃までに女王の求婚者と目される者達は何人かいたのだが、Leicester は最初の妻 Amy が1560年に死亡して以来長い間再婚しなかった。女王が Alençon と親密になった頃 Leicester も Lady Hereford, Lettice Knollys と親密になり1578年9月には身重の Lettice の父の強い示唆もあって結婚式を行うことになるのだが、その3年前の1575年6月に Warwickshire の Kenilworth 城に女王を招き、後世の歴史に残る程の豪華で技術の粋を集めた entertainments を19日間に渡って催した。Kenilworth 城は1562年、女王と Dudley の仲が最も親密な頃、女王が彼に与えた城である。彼は女王をここに招いて、10年前の寵愛を再度促すべく、また自らの恭順の意を示すべく、大がかりな催し物と架空の世界の創造に乗り出した。この時のことについては John Nichols の *The Progresses, and Public Processions, of Queen Elizabeth*¹⁵⁾ に詳しいが、女王が城に到着すると Hercules の扮装をした門番が入門を阻むが、女王の威厳ある美に屈伏する。次に神話上の神々が女王に恭順を示すべく現われる。森の神 Sylvanus は多くの珍鳥を入れた鳥籠を、果実神 Pomona は多くの果物を盛った皿を、穀物神 Ceres は穀物を、酒神 Bacchus は葡萄の房とワインを、海神 Neptune は高価な魚貝類を、軍神 Mars は武器を、各々が贈物として女王にさし出す。そして大神 Jupiter は大砲と雷を思わす花火の音で歓迎する。この時の特筆すべき催し物としては、前代未聞の技術を駆使した花火や、女王の好んだ熊苛めの競技やレスリングや軽業などがある。しかし特に Leicester は女王に対する自分の願いや意図を代弁する演劇や仮面劇に力を注ぎ周到に準備した。脚本家グループの主要なメンバーに George Gascoigne (1539～1577) が選ばれた。彼は Gray's Inn 出身の廷臣であり軍人であるが、演劇に悲喜劇という新しいジャンルを開き、秀れた散文も残している。彼の *The Princely Pleasures at Kenilworth Castle*¹⁶⁾ の中に Kenilworth で演じられた(またその予定であった)いくつかの芝居が記されている。一つは Gascoigne が創案し、台本を書き、自らセリフを述べたものであるが、全身を藁の葉で覆った野生人が Jupiter に訴えつづける一人芝居であるが、途中で女王に向かって訴える：

Yea since I first was borne,
I never joyed so much:
As when I might behold your face,
because I see none such.
And death or drearie dole,
(I know) will end my dayes,
As soon as you shall once depart,
or wish to go your wayes. (p. 101)

(私が生まれて以来、
貴女様の御顔をはじめて見た時ほどの
喜びを感じたことはない、

今迄に見たこともないものだったから。
そして（私は知っている）死や忌むべき
嘆きが私の生を終らすだろうことを。
もし貴女様が此処を去るか、
貴女の旅をお続けになるならば。）

Kenilworth の芝居の中で特に有名なものは二幕七場からなる Gascoigne 作の Zabetta の物語である。純潔と自由を信条とする Diana に忠誠を誓っている妖精達の中でも特に Zabetta を Diana は可愛がっていた。Diana の称える Zabetta は神々の力を凌ぐものであり、その知力においては Pallas を、美においては Venus を、音楽においては Apollo を、雄弁さにおいては Mercury を凌いでいた。その Zabetta が突然行方不明となる。八方探すが見つからぬので、Diana は父 Jupiter に嘆願する。Jupiter は Mercury を伝令として派遣し真実を報せる。それによると結婚を奨める Juno が Zabetta を連れ去り、あらゆる富や快楽や女性の好むものを与えているので、Zabetta は Juno の元で平和と至福を得て暮しているが、Juno も Zabetta の心の中までは支配することが出来ずにいるという。Mercury によって Zabetta の処へ案内された Diana は再会した Zabetta に、Juno のあらゆる策略にもかかわらず純潔を守り通している Zabetta を称え、結婚を選ぶか純潔を選ぶかは本人の意志に委ねると言う。しかし最後に Juno の伝令である虹の神 Iris が来て Zabetta に語ることは、女王になる前の惨めな自分自身のことを思い出すよう、そして獄舎の中の囚人となっていた時、純潔を守っていたのに Diana は何故救出してくれなかったのかと述べて次のように言う：

How necessarie were
for worthy Queenes to wed
That know you well, whose life alwayes
in learning hath been led.
...
Yet never wight felt perfect blis,
but such as wedded beene. (pp. 119-120)
(立派な女王は結婚することが如何に必要なことか、
貴女は知っている。その生活は常に学ぶことにあるのだから。
...
しかも結婚による以外には
人は決してこれ程の完全な至福を得られない)

この劇は Zabetta が主人公であるが彼女は登場してこない。即ち Zabetta は主賓 Elizabeth 女王のことであり、女王に結婚を奨めるためのものであるが、Gascoigne の記すところによるとこの劇は上演されなかったという。その理由については知らされなかったが。

女王の出発の日 Leicester は Gascoigne に別離に相応しい工夫を命じたので、作者自らが森神 Sylvanus に扮して、馬に乗って去ってゆく女王に追いつき言葉を述べようとした時、彼が息切れせぬようにと女王は馬を止めて聞いてくれたという。彼は森の木々について説明しながら柵の木を

指差して、これはかつての Deep Desire の変身した姿であると言う。Deep Desire は世間の非難を受けて最も惨めな者となったが、彼は「出世の遅れによっても意気を挫かれることはなく、女王の寵愛がなくても女王への愛情は冷めることはなく、老齢によっても疲れを知らず、どんな水も彼の炎を消すことはできず、死をも恐れることはない」(p. 126) が、貞節堅く冷酷な女王への恨みや嘆きが遂に彼を体中に棘を持った柵に変えてしまったのだという。柵の木立の中から Deep Desire の別離の詩が聞えてくる：

This Castle and the Knight,
 which keeps the same for you:
 These woods, these waves, these fowls,
 these fishes, these deer which are your dew,
 Live here good Queene, live here,
 you are amongst your friends:
 Their comfort comes when you approach,
 and when you part it ends. (p. 129)

(この城も、この騎士も、
 貴女のために変らず守られ、
 ここの森、湖、魚、鳥、
 ここの鹿は貴女のもの、
 立派な女王よ、此処に住んで下さい、
 貴女は友の中に居る、
 貴女が近づけば彼等にとっては慰め、
 貴女が立ち去ればそれは終る)

3. Philip Sidney

Walter Scott (1771-1832) の小説 *Kenilworth* の舞台にもなった Leicester 伯のこの城に、伯の甥の Philip Sidney も1575年の女王の行幸の折には滞在しこの余興を目撃した¹⁷⁾。これより2年(または3年)後に彼は Leicester 伯の Wanstead の館で女王が主賓であり主演でもある野外劇を創作した。Leicester はこの芝居の主催者でありパトロンであるから、当然ながら脚本家 Sidney は伯父の行事目的やその意図に相応しいテーマを考案しなければならない。*The Lady of May* のテーマは廷臣の二つのタイプ、或は仕事に対する二つの姿勢と言えよう。一方は音無しく、主君の命令に服従し、たとえ主君の方に非があっても陰で嘆くのみで反発しない。瞑想 (contemplation) の人と呼ばれている。他方は積極的で、命知らずの冒険家で、主君に非があると思えば忠告にも及ぶ。絶えず自分の野心を満足させる大きな仕事や地位を望んでおり、行動 (action) の人と呼ばれている。積極的で行動的な廷臣の代表が Leicester であるから、Sidney は当然パトロンである行動の人を称賛し肯定している筈である。しかるに女王は前者を選択する。作者は難しい立場におかれる。

作中で Leicester のことに触れていると思われる箇所が四つある。第一は Lady May のセリフの中で：

a certain gentleman hereby seeks to do you all the honour he can in this house;
that is not the matter; he is but our neighbour, and these be our own groves: (p. 24)

(ある一人の紳士が自分の家で出来る全ての歓待を貴女様にしようとしています。そのことは大したことはありません。彼は我々の隣人に過ぎません。ここは私達自身の森なのです。)

Leicester が近隣に住む者にすぎず、村人は主体性を持っていると主張しているのだが、Leicester がひっそりと蟄居しているとも解される。

第二と第三の箇所は女王が彼のことを自分の眼 (eyes) と呼んでいることから推測されるのだが、Rixus が女王について：

such a one as even with her eye can give the cruel punishment, (p. 27)

(御自分の眼に対してさえこんな冷酷な罰をお与えになるような方)

と言う。女王が自分の眼と呼んで寵愛していた Leicester をこの10年以上に渡る長い間寵愛も与えず冷遇していることを the cruel punishment と言っている。これに対して従順な廷臣の擁護派の Dorcus は：

They say in our town, they are dangerous both. (p. 24)

(我々の町では皆言っている。その両方は危険であると。)

と言い、Leicester を危険視する廷臣達の意見である。

第四の箇所は Rombus の述べるエピローグである。Rombus は Master Robert of Wanstead と呼び、はっきり Leicester を名指しており、エピローグ全体が Leicester の弁明になっている。エピローグの前半では領主として人望もあり、その徳を称えているが、後半で彼がカトリック信者であったことに触れ：

he is foully commaculated with the papistical enormity, (p. 31)

(彼は法王派の大罪でひどく汚れています)

そして更に

I have found . . . , a pair, of Papistan beads, . . . , with the which, every day, next after his pater noster he suits 'and Elizabeth', as many lines as there be beads on this string. (p. 31)

(ラテン語省略)

(私は一連のロザリオを見つけました、これで彼は毎日「主の祈り」の後に、このロザリオの数だけエリザベスによりてと唱えるのです)

と述べ、その後に Leicester が自らの違法性を認め、カトリック信者を示すロザリオが没収されて、二度とそれを請求しないということで釈放されたという説明が続く。しかし実際には Leicester がカトリック信者であるという事実はない。否、むしろ女王がカトリックの王族と結婚することに強く反対するグループの筆頭であり、カトリック国の中で迫害を受けているプロテスタントを救済し、プロテスタントの結束を計るプロテスタント同盟の推進派として知られている。何故 Sidney は事実と反する理由を Leicester の弁明に使ったのであろうか。Rombus は “he hath deponed all his juriousdiction” と言っているが、juriousdiction は例によって Rombus の記憶ちがいの言葉であり、injurious を想起させることから、「有害なこと」「過ち」などの意味であろう。禁教のカトリックを奉じる程の過ちを Leicester が犯しており、それを釈明することがこの野外劇の目的であったのだと思われる。ロザリオの祈りでは「アヴェ・マリアの祈り」を10回唱える度に「主の祈り」を一回挿入してゆくが、その時に「父と子と聖霊の名によりて」の後に「エリザベスの名によりて」をつけ加えて祈っているという。Leicester はキリストの三位一体の属性と同じ高さに女王を奉っているというのだ。これは一種の邪教であるが、女王崇拜からくる異教信仰故に彼は許されてしかるべきであるという弁明になっている。邪教信仰に価する程の Leicester の過ちとは具体的に何であったのか。2年前（または3年前）に Leicester は Kenilworth において最終的な求愛の一大イベントを行ったが成功しなかった。その後1578年9月に彼は Walter Devereux, Earl of Essex の未亡人 Lettice Knollys と結婚する。Lettice と深い仲になったのは Essex が1576年9月に死亡してから後のことであり¹⁸⁾、1578年春には二人だけの式を行ったが、身重になった彼女の姿に気付いた Lettice の父親の Sir Francis Knollys の示唆によって内輪の式が行われたのが9月である。女王が二人の結婚を知ったのは Alençon の特使に聞かされた時で1579年の秋以後とされる。1536年の法令で王族のメンバーと結婚する場合は国王の許可が必要となったので、この結婚は秘密結婚になる。女王はいつでも理由をつけてこの結婚に対して無効を命じることが出来るわけだ。

Sidney の *The Lady of May* の上演が1578年か1579年かはっきりしないが、少なくとも Leicester にとっては極めて微妙で際疾い時期であり、慎重な弁明が必要であった。他の女性と結婚しているが、彼は女王への崇拜の念は全く変わることない故に、神として崇め祈っているというのだ。Sidney の不可解なエピソードの背後には実に危うい現実があった。Sidney にとって初めて公になった文学作品であるこの劇は、パトロンの側から言えば、まずまずのものと言えらると思う。この後は女王は Alençon との結婚交渉に熱心になり、Leicester も結婚無効の咎めを受けることもなく、ロンドン塔送りになることもなかったからである。

次にこの作品がパトロンにとってではなく Sidney 自身にとってどういう意図を持ったものであったのかを探りたいと思う。

Sidney は Oxford の Christ Church で勉学した後、1572年から1575年までの3年間ヨーロッパ各地を旅した。各国の言葉や学問を学ぶだけでなく、各国の宮廷を訪れ要人と会い各国の具体的な外交や政治の問題を知ることもその目的であった。父 Henry Sidney は Wales 長官や Ireland 代理知事を務める宮廷官吏であり、彼も官吏への志を持っていた。1577年新しく即位したドイツ皇帝 Rodolph 2 世の元へ Elizabeth 女王の大使として即位の祝いと故皇帝への哀悼の辞を伝えるべく派

遣された。はじめて彼は自分の目的に添った仕事を与えられたのである。Sidney は自分の職業について少年の頃から志を持っていたことを生涯の友 Fulke Greville (1554-1628) が、その著 *A Dedication to Sir Philip Sidney*¹⁹⁾ の中で述べている。Greville は Sidney と同年令で、共に Shrewsbury School で学び、同じ様に宮廷官吏の道を目差していた。Sidney 以上に長生きした彼は Elizabeth 1 世, James 1 世, Charles 1 世の 3 代の王に仕え、James 1 世の時には大蔵大臣を務めている。彼は Sidney について次の様に述べている。「その若い頃についてこれ程驚嘆を与える人を私は他に記すことが出来ない。私は彼と共に生活し、彼を子供の頃から知っているが、こんなに真面目な精神を持ち、ずっと年上の方が持つような優雅さと威厳からくる愛すべきまた好かれる荘重さを持った人を他に知らない。博識な彼の話や、精神を豊かにするための彼の遊びは、教師達にいつも教えたり読んだりしている事以上の何かを彼の中に発見させていた」(p. 5) そして「もし彼の目的が書物の中に自分の記憶を残すことであったら、論理、哲学、詩、歴史の分野において、否、機械技術の最も巧妙な分野においてさえ、名を残せたとは私は確信している……。しかし真実について述べるが、彼は著作を行っている時でも目的は書くのではなく、彼の知識も宴会や学校で使用されるためでもなかった。彼の心を傾けさせる知性や理解力は、彼自身と他の人々の言葉や意見に向けられたのではなく、偉大な善い行動と人生に向けられた。これらを構築する技においては彼は正に大家であったが、人々に対して余りにも力強いしかし余りにも公平な態度であったから、何処に行っても彼は愛され従われた。」(p. 12)

エリザベス朝時代の第一線の作家であり詩人であった Sidney であるが、彼自身は別の目的を持っていた。文筆によってではなく、行動と生き様によって国に献身する事、具体的には軍人や外交官を目差していた。彼がヨーロッパでの 3 年間の遊学中最も大きな影響を受けたのは師と仰ぐ Hubert Languet (1518-1581) である。Languet は Padua 大学の市民法の教授であったが、Wittenberg 大学で Melancthon に出会って影響を受けてからは、カトリック信仰を捨ててプロテスタントになり、特にユグノー派の指導者となり、Saxony 選挙候の秘密の外務大臣を務めていた。Sidney は彼に色々な事で教えを仰いでいる、「お願いですから今起っている外交上のニュースと貴方が関りを持っている事柄について私に話して下さい。といいますのは私達の生きているこの時代は余りにも長く余りにも曲っている弓、もし弦を緩めてやらなければ直ぐに折れてしまいそうな弓であるこの時代の全貌が貴方の書簡の中で掴めるように思われるのです。それ故、親愛なる Hubert、貴方が書物に著そうと思っていらっしゃる貴方の思想の全てを私に書き送って戴きたいのです。貴方の手紙は私にとってあらゆる理由で喜びなのです。主たる理由はそれが貴方自身のものだからなのです」²⁰⁾ と言っている。Languet は Sidney の中にイギリス宮廷を代表するプロテスタント指導者となり、外交官となる大器を見出し、学ぶべき事を系統的に指導し鍛えてゆく。

「君は天文学の基本については充分学んだ、しかしこの学問をこれ以上研究する必要はないと私は忠告する。これは大変難しいもので君には余り価値がないと思うからだ。幾何学に君の関心を向けることが賢明かどうか私には判らないが、これは素晴らしい学問であり、思慮深い応用に充分価する。しかし君は君自身についての展望がどんなものなのか、また如何に直ぐに書物による快楽を諦めねばならなくなるかを考えておかねばならない。今後は君の持っている短い人生の全てを完全に

必要なものにだけ捧げるべきである。私が“必要なもの”と言うのは、身分のある者が人生において知らなくては恥しい事柄、そしてゆくゆくは君にとって装飾となり豊かな資産となって役立つような事柄を言っているのだ。確かに幾何学は将軍にとっては、都市を包囲したり、要塞を築いたり、陣営を選んだり、あらゆる建設において大変価値があるかもしれないが、実際に役に立つ程の知識を得るには多くの時間が必要だ。役立ちではなく体裁のためにあらゆる学科を生嚼りするのは大変愚かしいことだと思う。更に、君の性質の中に面白みが余りにも無く、君を一そう厳めしくするのがこの学問である。これは思考の綿密な適用を要し、精神の活発な部分を消耗させ、身体を非常に弱らせる。そして一口嚼ってみると、これが健康をもたらすものではないことを知ることになる。再びギリシャ文学についてであるが、これは大変美しい学問であるが、完全に研究するだけの暇は君にはないであろう、そしてどれ程時間があってもラテン文学を学ぶ時間を割いてこれに当てねばならぬであろう、ラテン文学はギリシャ文学ほど華麗ではないが、君にとってはずっと知る価値がある。それ故私は君にどう忠告すべきかは知らないが、ただ私は君が最も必要なものを学ぶように願っている。」²¹⁾ Languet は学問研究によって抽象的な知識を増やすことよりも、現実に関与する行動を奨めており、この点が Sidney に最も影響を与えた部分と思われる。*The Lady of May* とほぼ同じ頃に書き始めた Sidney 自身の詩論 *A Defence of Poetry* の中で自分自身について述べている。「私は自分に詩人という肩書を欲したことはないので、それを得る手段を無視してきた、唯いくつかの思想に心酔したので、それらを筆墨に認めたに過ぎない」(p. 111) と述べ、更に「アリステレスが言っている様に *gnosis* (知識) ではなく *praxis* (行動) がその結実でなければならない。そして行動へと心が動かされることなくどうして *praxis* と言えようか」(p. 91) と述べている。即ち国家に役立つ人間になることを志す Sidney は *gnosis* のみの提供者になるのではなく、確実な *gnosis* に精神を立脚させつつ身体を使って *praxis* に励み、実践することが理想的な宮廷人であると考えている。

限られた観客の前ではあったが、初めて人々の前に公開する自作 *The Lady of May* を、彼は自分自身を打ち出す機会として把握し、充分に工夫した筈である。女王への賛辞、パトロン Leicester の弁明が作者に課せられている義務であるが、それを果たしつつ作者自身の考えが打ち出されているのは Dorcas と Rixus のセリフの中にある。Dorcas は *contemplative* な羊飼いを代表しているが、*contemplative* であるのは女王から寵愛が得られず、働きが正当に評価されない廷臣達が、その嘆きや不満を空想の世界で紛わせているに過ぎないとしている。また Rixus は *active* な獵人を代表しているが、野心的な廷臣達が危険な冒険に乗り出してゆくのは、女王から評価や感謝が得られず次から次へと難題に挑戦せざるを得ないからである。疑心暗鬼になっている彼等が無駄に費すエネルギーを適材適所に生かして欲しいと訴えている。後に Sidney が女王に当てた手紙 *A Letter to Queen Elizabeth*²²⁾ の中で次のように言っている。「(廷臣の) 特別の行動には恩顧を与えて戴きたいのです。(私が思いますには、それは容易くなされることです)、そのことが陛下の臣下達の心に喜びをもたらすのです。陛下が信頼し、重要な事柄を任せておられる者達を、陛下の廷臣達の目の前で支持してやって戴きたいのです。」(p. 56-57)

註

- 1) John Nichols, *The Progresses, and Public Processions, of Queen Elizabeth* (London: The Society of Antiquaries of London, 1788).
- 2) Katherine Duncan-Jones, "Introduction of *The Lady of May*," in *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*, ed. Katherine Duncan-Jones and Jan Van Dorsten (Oxford: The Clarendon Press, 1973), 13.
- 3) Philip Sidney, "The Lady of May" in *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*, ed. Katherine Duncan-Jones and Jan Van Dorsten (Oxford: The Clarendon Press, 1973), 21–32.
- 4) Sidney, *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*, 73–121.
- 5) Louis Adrian Montrose, "Celebration and Insinuation: Sir Philip Sidney and the Motives of Elizabethan Courtship," *Renaissance Drama*, n.s. 8 (1977), 3–35.
- 6) Robert Dudley については次の三冊を参考にした。
Carole Levin, *The Heart and Stomach of a King: Elizabeth I and the Politics of Sex and Power* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1995).
J・E・Neale, *Queen Elizabeth I* (London: Penguin Books, 1971).
Maria Perry, *The Word of a Prince: A Life of Elizabeth I* (Woodbridge: The Boydell Press, 1995).
- 7) Perry, *The Word of Prince*, 113.
- 8) Perry, *The Word of Prince*, 130.
- 9) Marie Axton, *The Queen's Two Bodies* (London: Royal Historical Society, 1977).
- 10) Marie Axton, "The Tudor Mask and the Elizabethan Court Drama," in *English Drama: Forms and Development, Essays in Honour of Muriel C. Bradbrook*, ed. Marie Axton and Raymond Williams (Cambridge: Cambridge University Press, 1977), 32.
- 11) Axton, "The Tudor Mask and the Elizabethan Court Drama," 25–26.
- 12) Levin, *The Heart and Stomach of a King*, 47.
- 13), 14) Perry, *The Word of a Prince*, 173.
- 15) Nichols, *The Progresses, and Public Processions, of Queen Elizabeth*, I, 1–92.
- 16) George Gascoigne, "The Princely Pleasures at Kenilworth Castle," in *The Complete Works of George Gascoigne* ed. John W. Cunliffe (New York: Georg Olms Verlag, 1974), II, 91–131.
- 17) H. R. Fox Bourne, *A Memoir of Sir Philip Sidney* (London: Chapman and Hall, 1862), 96.
- 18) Perry, *The Word of a Prince*, 159.
- 19) Fulke Greville, "A Dedication to Sir Philip Sidney," in *The Prose Works of Fulke Greville, Lord Brooke*, ed. John Gouws (Oxford: Clarendon Press, 1986), 3–135.
- 20) Bourne, *A Memoir of Sir Philip Sidney*, 78.
- 21) Bourne, *A Memoir of Sir Philip Sidney*, 75–76.
- 22) Sidney, *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*, 46–57.